

『体験を問いつづける哲学 第一巻 ジェンドリン初期哲学と体験過程理論』（三村尚彦、ratic、二〇一五年）

〔著者による新刊紹介〕

『体験を問いつづける哲学 第一巻

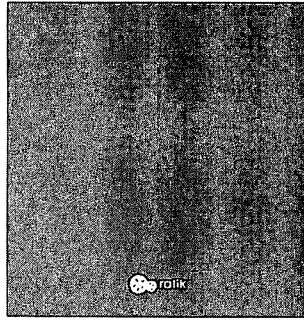
ジェンドリン初期哲学と体験過程理論』

（三村尚彦、ratic、二〇一五年）

三村尚彦

体験を問いつづける哲学
第1巻 初期ジェンドリン哲学と体験過程理論

三村 尚彦



二〇一五年一〇月、学術専門図書出版のNPO（特定非営利活動）法人 ratic より、拙著『体験を問いつづける哲学第一巻 ジェンドリン初期哲学と体験過程理論』を刊行した。本書は、電子書籍であり、ratic のサイトから購入すると、電子書籍の標準的フォーマットであるEPUBファイルと、汎用的なデジタル文書形式であるPDFファイルの二つがダウンロード可能となる。本書を読むには、パソコン、タブレット、スマートフォンのいずれかの媒体が必要となるが、電子機器の扱いが不得手な方のために、ratic では二〇一六年一月より、オンデマンド・プ

リントアウト・サービス (PDF ファイルを印刷した冊子体の提供) を開始している。

本書は、アメリカの臨床心理学者ユージン・ジェンドリン (Eugene T. Gendlin, 1926 -) が提唱した体験過程理論 (theory of experiencing) を詳論したものである。ジェンドリンは、フォーカシング (focusing) と呼ばれるカウンセリング技法を創始したことで、心理学において世界的に著名な研究者である。彼の名著『フォーカシング』(一九八一年) は、世界一七カ国語に翻訳され、多くの心理療法研究者によって受け入れられてきた。その一方で、ジェンドリン自身はシカゴ大学、同大学院とも哲学を学び、博士号も哲学で取得している。臨床心理学の研究と平行しながら、一貫して哲学の論文、著書を発表しつづけてきた。従来、ジェンドリン研究のほとんどはフォーカシング指向心理療法に関するものであったが、最近になって彼の哲学は、専門ジャーナル「現象学と意識研究」などで取りあげられ、その意義や可能性が論じられるようになってきた。ニューヨークに本部のある国際フォーカシング・インスティテュートでは、二ヶ月ごとに哲学フォーラムをネットミーティングで開催し、アメリカ、ドイツ、スイス、オーストラリア、日本の研究者がジェンドリン哲学をテーマとしたディスカッションを行っている (筆者もフォーラムのメンバーで、二〇一五年六月に研究発表を行った)。こうした動向のなかで、本書は、カウンセリング研究から独立に、ジェンドリン哲学そのものの批判的検討を通じて、フォーカシングがもっていると思われる哲学的な可能性を考察した。本書シリーズは全三巻で、第二巻『新しい現象学とプロセスモデル』と第三巻『フォーカシング指向現象学の展開』(いずれも仮題) が、刊行予定である。以下、紙幅の許すかぎり、本書の内容を紹介していきたい。

本書は、八つの章からなり、ジェンドリンの初期哲学を、概ね時系列に論じている。序章では、フォーカシングというカウンセリング技法、およびジェンドリンの経歴を述べている。ジェンドリンは、セラピー面接の膨大な録音記録を分析することで、カウンセリングが成功している事例とそうでない事例の違いを検討し、その鍵がクライエン

トの話し方にあることを見いだした。セラピーを成功へもたらす要因は、いわゆるカウンセラーの技能でもなければ、カウンセリングの手法や理論でもなく、クライエントがフェルトセンス (felt sense) と呼ばれる「言語に先立つ漠然とした身体的な感じ」に注意を向け(フォーカスし)、それに触れながら語ることにある。そうした語りは、自己理解を進め、何らかの気づきをもたらすことによって、セラピーの効果を高めるとされている。これまでできなかった(と言ってもごく最近になってからであるが)ジェンドリン哲学研究は、そのほとんどすべてがフォーカシングの実践研究にもとづいている。筆者はフォーカシングをこれまで一度も体験したことがなく、今後もするつもりはない。フォーカシングというフィルターを外して、ジェンドリン哲学を考察する姿勢は、本書の独自性となっている。

第一章は、若きジェンドリンが、修士論文として執筆したデルタイ論「ヴェイルヘルム・デルタイと精神科学における人間的有意義性の把握の問題」(一九五〇年)を取りあげた。ジェンドリンは、たびたびデルタイから強い影響を受けたと言及しているが、それがどのようなものであったのかは明示されていない。本章では、彼の修士論文を追いながら、デルタイ哲学のいかなる面に彼が関心を寄せていたのかを明らかにしている。

第二〜七章では、ジェンドリン初期の哲学的著作 *Experiencing and the Creation of Meaning, 1962* (以下、ECMと略記)をその章ごとに概説した。ジェンドリンがECMの中心として第三章「感じられた意味はどのように機能しているのか」に関して、批判的な考察を行った(本書第四章)。ジェンドリンは、感じられた意味はシンボルと相互作用し、その機能的関係のうちで新しい意味が創造されると主張する。これが体験過程理論の根幹にある思想である。言葉に先立った漠然と感じられているもの(感じられた意味、後のフェルトセンス)を、なんとか言葉に表現する(シンボル化)と、体験の新しい理解が生じてくる、というものである。その際ジェンドリンは、感じられた意味とシンボルの間に慣れ親しんだ一対一対応の関係が成立するものを平行的関係、またそうした対応関係が成立せず、

新しいシンボル化によって新しい意味理解が成立するものを、非平行的関係と呼ぶ。平行関係は、直接照合・再認・解明の三つに、非平行的な関係は、メタファー・把握・関連・言い回しの四つに分類される。本書は、従来これら七つの機能的関係がフォーカシングセッションをモデルにして解釈されてきたことに対して、カウンセリング場面を一切抜きにした理解を示した。平行関係においては、日常生活における自明性の哲学的基礎づけ論として読む可能性を考察した。また平行―非平行的関係の区別が、ジェンドリン自身が主張した機能的な関係把握に抵触していることを指摘した。ジェンドリンは、既存の言葉による感じられた意味のシンボル化と、メタファーなど創造的な言語使用によるシンボル化が原理的に区別できると考えており、最終的に体験に関する創造的な理解を後者（メタファー）に還元しようとしている。本書の見解では、感じられた意味をシンボル化するのが、既存の用語であろうと、メタファーであろうと、そこに新しい気づきをもたらすかどうかこそが重要なのである。なじみの表現によっても、思ってもみなかった体験の側面が明るみにもたらされることはいくらかでもあり、その際の機能的関係は、創造的と見なされるべきなのである。その他、ECM全体の問題点などの指摘も行っている。本書シリーズの最終構想は、フォーカシングを現象学に取り入れ、現象学的記述の詳細化を図ることにある。

なお、本書の合評会が、二〇一六年二月一三日（土）関西大学大学院心理学研究科池見ゼミの企画で、行われたことを記し、コメンテーターを務めていただいた池見陽先生（関西大学臨床心理専門職大学院）、村川治彦先生（関西大学人間健康学部）、田中秀男さん（関西大学大学院心理学研究科）のお三方には、この場を借りて、お礼申し上げます。